聖　書：創世記 13：1〜18
説教題：さあ、目を上げて
日　時：2023 年 7 月 2 日（朝拝）

神からの召命を受けて神に従う信仰の旅へと出発したアブラム。その彼にさっそく最初の試練が訪れたことが前回の箇所に書いてありました。それは激しい飢饉が起きたということでした。アブラムはその状況に直面して主に祈り、主の御心を尋ねることなく、エジプトへ下りました。そして何とか人間の知恵で乗り切ろうとして妻サライに「私の妹だと言ってくれ」と頼みました。サライが美しい女性だったため、自分が彼女の夫だと明かしたら自分殺されるだろうとアブラムは恐れたからでした。しかし事態は思わぬ方向へと進みました。サライはエジプトの王ファラオの妻として召し入れられ、アブラムは状況をコントロールできなくなくなりました。アブラムとサライに子を与えて大いなる国民を作り、全世界を祝福しようとする神の計画は開始早々頓挫しそうになりました。しかし憐み深い神の介入により妻サライは返され、アブラムはエジプトを出ることとなります。人間の知恵や力に頼って事を乗り切ろうとすることが何と愚かであるか、アブラムは体験を通して思い知らされたことでしょう。

その彼は今日の 13 章でネゲブへと戻り、さらにベテルまで旅を続け、ベテルとアイの間まで来ました。ここは最初に天幕を張った場所であり、祭壇を築いて神を礼拝した場所でした。彼はここでもう一度信仰の原点に立ち戻ります。エジプトに逃れていた間、彼の生活に祭壇はありませんでした。しかし彼はここに戻って来て主の御名を呼び求め、主との交わりを第一に大切なこととして歩むという信仰者の基本形に戻ります。このことがこの後の出来事においいて大きな意味を持つことを私たちは見ることになります。

さて主と正しい関係に戻ったということは苦しみや試練がなくなることを意味しません。休む間もなく次のテストがアブラムに臨みます。今回は彼の持ち物が増えたことと関係しました。2 節に「アブラムは家畜と銀と金を非常に豊かに持っていた」とあります。ハランを出発する時、色々な物を売り払ってすでにある程度の富を持っていたのでしょうが、エジプトでの出来事を通してさらに豊かに持つ者となったのでしょう。5 節を見ると甥のロトもそうでした。その彼らには一緒に住むのが難しいという問題が生じていました。特にそれぞれの家畜の牧者たちの間に争いが生じていま

した。さてどうしたら良いでしょう。アブラムは別れて生活する以外、平和に歩む道はないと考えました。しかし問題はお互いが住む場所をどのように決めるかです。アブラムは驚くべき提案をします。8〜9 節 :「アブラムはロトに言った。「私とあなたの間、また私の牧者たちとあなたの牧者たちの間に、争いがないようにしよう。私たちは親類同士なのだから。全地はあなたの前にあるではないか。私から別れて行ってくれないか。あなたが左なら、私は右に行こう。あなたが右なら、私は左に行こう。」アブラムはロトに選択権を与えました。彼らの前にあったのは似たような土地ではありません。片方には良く潤っている地があり、片方はそうでありません。どちらを選ぶかは今後の生活に大きな影響を与えます。

しかもその相手は誰だったかを考慮するなら、さらに驚きです。相手は甥のロトでした。年下の者です。父ハランがなくなり孤児となっていた彼を、テラとアブラムはこれまで面倒を見て来ました。そんなアブラムは年長者として、自分がすべてを決定してもおかしくないはずです。私はこっちに行くからあなたはそっちに行きなさいと命令すれば事は決まりです。ところがアブラムは年下のロトに選択権を譲りました。あなたが良い方を選びなさい。あなたが左に行くなら、私は右に行こう。あなたが右に行くなら、私は左に行こうと。

なぜ彼はこうできたのでしょうか。それはやはりこの章冒頭で彼の信仰生活が回復したことと深く関係しているのではないでしょうか。アブラムは主に祈り、主を礼拝し、主の約束に目を留め、主に感謝して生きるようになりました。主は私を祝福し、必ず子孫を与え、この地を受け継がせてくださる。その主に信頼する者として彼は人間的な知恵と方法で祝福を手に入れようとすべきではないと考えたのです。主は必ず約束を果たしてくださる。だから自分のすべきことは主に喜ばれるように歩むことである。新約聖書に「人からしてもらいたいことは何でも、あなたがたも同じように人にしなさい」というイエス様のお言葉があります。またピリピ人への手紙 2 章 4 節に「それぞれ、自分のことだけでなく、ほかの人のことも顧みなさい」とあります。人は主と正しい関係にある時、このように広い心を持つようにされるのです。主が私を祝福してくださるという確信と喜びを持つ時、人はその心に余裕を持ち、主が喜ぶ道を進んで選び取るという歩みができるようにされるのです。

一方のロトはどうだったでしょうか。本来ロトはアブラムの提案を聞いて恐れ、恐

縮して、遠慮すべきでした。これまでさんざんアブラムにはお世話になりました。なのに「先に好きな方を取って良い」と言ってくれるアブラムの言葉を聞いて畏れるべきでした。そんなことはできません。おじさんが良い方を選んでください。私がそうでない方を行きますからと。ところが彼はどうしたでしょう。何と彼は遠慮なく、自分が良いと思う地域を取ります。あまりにも図々しい姿です。11 節にロトは「自分のために」ヨルダンの低地全体を選んだとあります。彼が考えているのは自分のことだけでした。これによってアブラムにどんな不利益を与えるかということは全く考えていません。自分が欲しいものを取る。取って良いと言われたから、好きな方を取る。それだけです。

そしてロトの判断基準は何だったでしょうか。アブラムに「全地はあなたの前にあるではないか」と言われてロトが目を上げてみると、ヨルダンの低地全体はツォアルに至るまで、すなわち死海の南端に至るまで、主の園のように、またエジプトの地のように、どこも良く潤っていたとあります。それを見てロトは決めました。その原理は「目に見えるところに従って」ということです。明らかにその土地の方が自分の目に訴えるものがあり、祝福を約束していると考え、彼は迷うことなくそちらを選びました。こうして 12 節にある通り、アブラムはカナンの地に住み、ロトは低地の町々に住みます。さらにロトはソドムに天幕を移しました。

しかし 13 節にはロトが選んだ町について不吉なことが書かれています。「ところが、ソドムの人々は邪悪で、主に対して甚だしく罪深い者たちであった。」　ロトが見えるところに従って引き寄せられて行った町は実は罪で一杯の町でした。このあと見るように、この町に住むロトには大変なことが起こります（14 章、19 章）。ここからただ目に見えるところで判断することはいかに危険であるか、私たちは警告を受けます。ソドムの町は一見華やか。一見豊か。そこで生活すれば人生の幸せは確定すると思われました。ところがそこに住む人々は罪深く、そこはやがてさばかれることになる町でした。一方、主に信頼して自分中心に物事を決めなかったアブラムは、逆にこうして守られることとなりました。主に信頼して従う時、知らずして人は災いから守られることになるということをこの一語からも私たちは教えられるのではないでしょうか。

さてロトがアブラムから別れて行った後、主がアブラムに言われた言葉が 14〜17

節にあります。「ロトがアブラムから別れて行った後、主はアブラムに言われた。『さあ、目を上げて、あなたがいるその場所から北、南、東、西を見渡しなさい。わたしは、あなたが見渡しているこの地をすべて、あなたに、そしてあなたの子孫に永久に与えるからだ。わたしは、あなたの子孫を地のちりのように増やす。もし人が、地のちりを数えることができるなら、あなたの子孫も数えることができる。立って、この地を縦と横に歩き回りなさい。わたしがあなたに与えるのだから。』」　ここにアブラムがロトに対してしたことと主がアブラムに対してしてくださったこととの間にある種の平行関係を認めることができるように思われます。まずロトはアブラムに促されて 10 節で「目を上げて、ヨルダンの低地全体を」見渡しました。それと同じようにここでは主がアブラムを促して「さあ、目を上げて、・・見渡しなさい」と言っています。またアブラムは 9 節で「全地はあなたの前にあるではないか」と言ってロトに目の前の土地を差し出しました。それと同じように主はアブラムの前に土地を差し出し、見渡しているこの地をすべてあなたに与えると言っています。そうしてロトは差し出された地に向かって進んで行きましたが、アブラムも主に差し出された土地を縦と横に歩き回りました。これは私たちに何を語っているでしょうか。それはアブラムがロトに対してしたように主がアブラムに対してしてくださったということではないでしょうか。私たちが他の人に対して何かをした時、それだけを見れば気落ちする思いにもなるかもしれませんが、主がそれと同じように私にしてくださるのです。それどころかさらに大きな祝福がここでアブラムに示されています。ここで彼に言われたことは、これまで言われて来たことより、さらに詳細で大きなものとなっています。これまで主は「わたしは、あなたの子孫にこの地を与える」（12 章 7 節）と言われただけでしたが、今日の箇所では、見渡している地域全部を与えると言っています。また「あなたに、そしてあなたの子孫に永久に与える」と言っています。さらにあなたの子孫を「地のちりのように増やす」と言っています。しかしアブラムはこれらの約束を単に「地上的」「この世的」に捉えていたのでないことを私たちは心に留める必要があると思います。ヘブル人への手紙 11 章 13〜16 節に記されている通り、アブラムはこの世の都ではなく天の都を見つめてその生涯を歩みました。真の幸いはこの地上の土地を多く持つことにあるのではありません、アブラムを始めイサクやヤコブといった族長たちは、地上的なものを通して天上の祝福を見つめ、瞑想して歩みました。ですからアブラムもここで目を上げよと言われて目の前にある土地を見つめたでしょうけれども、その心はさらに高く、神がくださるいつまでもなくならない天の祝福、天の故郷の祝福にあげられていたことを私たちは思う必要があると思います。

最後の 18 節はこの章最後の言葉で重要な意味があります。アブラムは天幕を移してヘブロンにあるマムレの樫の木のそばに来て住みました。そしてそこに主のための祭壇を築いたという言葉でこの 13 章は締め括られます。祭壇に復帰したところから始まった創世記 13 章は最後も祭壇で閉じています。これが信仰者の正しい状態であり、このような者に主の祝福があるということをこれは物語っているのではないでしょうか。

私たちは今日の箇所で見たロトとアブラムの内、どっちの道を行く者でしょう。ロトの道は自分のために！ということを第一の判断基準とする道です。また目に見えるところに従って歩む道です。その先に悪が待っていることも知らずに突き進む道です。一方のアブラムの道は神に信頼し、神との交わりから力を得て、自分のことよりも他者を重んじ、他者に仕える道です。どっちがキリストに似ているかと言えば、それはやはり後者です。もし私たちにもそのような歩みができるとすれば、それは私たちが神との生ける交わりに生きている時でしょう。神は豊かな祝福を私たちに約束くださっています。神は一切を支配しておられ、必ずご自身の最も良い計画を実現してくださいます。その神を信じ、神を喜んでいるなら、目の前のことにあくせくしなくて良い。それを自分のものにしなければ自分の幸いはないと考えて人と争う必要はない。むしろ主に信頼し、主に喜ばれる道だけを進めば良い。そして主が主の方法で与えてくださる一番良いものを受け取って行けば良い。そういう広い心を神は与えてくださいます。そのための鍵は祭壇です。私たちの毎日の生活の中にこの祭壇は築かれているでしょうか。日々神と交わり、神のことばを聞き、神がくださるものを見つめて喜ぶ時、私たちは地上的な欲望を放棄し、この世のものに淡泊となり、この世のものから自由になって歩むことができます。神がはるかに大きな救いと祝福を約束くださっていることに感謝して、イエス様が歩まれたように、「自分にしてもらいたいとおり、他の人にもする」という生き方へ進むことができます。そういう人に神は「さあ、目を上げて」と言って、さらにご自身が与えてくださる祝福を見るように励ましてくださいます。私たちは神がくださる、いつまでもなくならない救いと祝福を喜び見つめて神に喜ばれる道へ進み、そうして神がくださる豊かな祝福を受け取る幸いな信仰の歩みへ導かれて行きたいと思います。